

## 特別寄稿エッセイ

## 「明日の災害ボランティアへ」

## ◆早瀬昇

(大阪ボランティア協会/事務局長)

●震災直後から「阪神・淡路大震災 被災地の人々を応援する市民の会」を結成し、西宮市、芦屋市、東灘区に現地事務所を開き、一般市民公開型の被災地内ボランティアセンターとして、約2万1千人のボランティアのコーディネートにあたった。

## フットワークと自己責任

「小さな親切、大きなお世話」。こんな表現があるようにボランティア活動では相手の意志を確かめることがとても大切です。しかし、災害発生という時、この原則にとらわれすぎると「機を逸する」場合が少なくありません。被災者が「応援してほしい」というメッセージを出せないことが多いからです。

こんな時に重要なのが「フットワーク」。腰の軽さと言い換えても良いのですが、要は頼まれるのを待たずに現地に飛び込む姿勢です。「指示」を待ち、受入態勢といった「お膳立て」を期待しては、いつまでたっても動けないことになりかねません。

実際、災害発生直後の被災地を支えたのは、まず被災者自身による助け合いでしたが、それに次いで頼まれもしないのに「放っておけない」と現地に飛び込んだフットワークの良いボランティアたちが大きな役割を果たしました。

ただし、いわば「勝手に」飛び込むのですから、現地で役に立てる保証はないし、そもそも快く迎えられるかどうか分かりません。飛び込んでみて「役に立てない」と思ったなら、帰る。それが「善意の押し売り」とならないための条件です。「善意」の行為が「善行」になる保証はありません。フットワークの良い行動の起点は、おうおうにして思いつき。フットワーク(腰の軽さ)が成果をもたらすには、「善意の思いつき」で動くのだと考え、いたずらに「正義」を押し付けない姿勢が必要だと思います。

なお、ボランティアという言葉の原義をつきつめると「自分で考え、自己責任で行動する人」ということになります。自分の行為に伴ってトラブルが起こっても、その責任は自分が負うんだという姿勢が大切だということです。その意味で食料持参などで「自己完結」する、つまり現地に依存しない態勢を整えることは不可欠でしょう。

## ◆小野田全宏

(静岡県ボランティア協会/事務局長・市民活動サポートセンター)

●震災当初は、協会職員を被災地に派遣し、現地のボランティア拠点「被災地の人々を応援する市民の会」でコーディネーターとして活動を応援。また、県内に呼びかけ、コーディネーターとして役割を担える人材を同拠点に派遣するとともに2箇所独自の宿泊場所を確保。その他、静岡市内において街頭募金活動、ボランティア募集を行った。

## 期待されている人 大丈夫ですか？

阪神・淡路大震災は私たちに様々なことを投げかけてくれた。私たちは、東海地震や神奈川西部地震が心配される静岡県に住んでいる。その、東海地震説が発表され21年が経過し、何時来ても可笑しくないとわれながら、今日に至っている。あの日、(1995年1月17日)テレビ画面を食

い入るようになっていた被災地「阪神淡路」の光景は、「次は自分たちの番だ。その時どうしよう、大丈夫だろうか」であった。阪神・淡路大震災で、震災直後から被災者自らが救援活動に立ち上がり、全国から120万とも130万とも言われる人々が、ボランティアとして救援活動に参加し、被災地の



## 『明日の災害ボランティアへ』

人々の大きな支えになったことは、私たちに希望を与えてくれた。

その後、静岡県ボランティア協会では、『災害時におけるボランティアコーディネーター養成講座』（講座内容 ①静岡県の防災体制、②シンポジウム「東海地震に備え、阪神淡路大震災から学ぶ」、③災害救援と精神的ケアのあり方、④ボランティアコーディネーターに求められる基礎知識、⑤地域の災害対策を知ろう、⑥平常時及び災害時のボランティア活動、⑦ボランティアの受入れ体制—全4日間）を開催し、災害時にボランティア活動を迅速に受け入れ、効果的な活動が展開できる体制と、災害に備えた日ごろのネットワークづくりに取り組んでいる。これらの取り組みを通じ、阪神・淡路大震災で投げかけられた様々な課題に対し、余りにも無関心（自分とは無関係の出来事のような意識）というのか、誰かがやってくれるかのご

とくに考えている人が多いのには驚いている。

過日(10月18日)関西空港線を利用し、木造の建物の屋根にビニールシートが掛けられ、震災の爪痕がそのままになっている家を何軒か目にし、改めて震災の傷の深さを思い知らされた。阪神・淡路大震災によって引き起こされた様々な問題は、これまでボランティア活動に何らかのかたちで関わって来た者にとって、自分たちの生き方、あり方が問われていることであることだけはたしかである。日頃「ボランティア活動」のことについて分かっていると思われる機関や人が意外にも何も具体的なアクションを起こしていない現実にも危機感を抱いている。そんなんでいいんですか？何時、その時が来るのか分からないんですよ。

その時、気づいても遅いことだけは確かだ。

## ◆高橋正幸

(神戸市／生活再建本部自立支援課長)

●1996年5月末より神戸市民政局災害復興担当部仮設住宅調整担当課長として、仮設住宅に関わって3年半、入居管理だけでなく生活再建までをオールラウンドにこなす。部署、役職名は代わったが、仮設住宅に関して彼の右に出る行政マンはいない。

## ボランティア—被災者と行政を結ぶ市民活動への期待

わが国では、かつてこれほど多数の市民がボランティアとして救援活動に取り組んだ例はない。

ボランティア—volunteerとは、元来、志願兵を指す言葉であるという。市民活動としてのボランティア活動を考えるとき、この大元に戻ってみると理解がしやすい。災害発生の直後の危険未だ冷めやらぬ被災地に、敢然と飛び込むボランティアの姿は、志願兵に相応しく心強いものであった。しかし、そのボランティアと市民、行政の関わり方について、わが国では成熟した関係をなかなか見いだせなかったというのが、残念ながら実感として一方にある。

ボランティアは決して行政の補完的存在ではないが、対立的存在でもない。もっとも支援を必要としている被災者＝市民と行政との接点にあって役割を分担し合うものではないだろうか。市民運動についてのボランティア活動の未成熟を指摘す

るときには、行政、市民のボランティアに対する理解の不足、相互信頼の不足などを認識せざるを得ない。むしろ、行政の一端を担うものとして、あの時にせつかくの市民のエネルギーを活用しきれなかったという反省があるが、今後の市民社会の成熟に向け、真剣にボランティアと行政の協力関係を確立する努力が試されねばならないと思う。

行政の目指すところを端的に言うなら、最大多数の最大幸福ということになろう。しかしそれは反面で少数者の幸福を切り捨てることではないかとの危惧が指摘される。決してそうではないが、相対としての市民を対象に、公平性や平等性を追求しようとする行政に対し、個々の市民、個別的ニーズを立脚点とするボランティアの在り方というものが、行政の見落とししがちな視点を補い、より質の高い支援活動に不可欠だと思う。



災害時に限らず、市民と行政を結ぶ市民活動としてのボランティア活動に期待するところは大きく、ボランティア、行政の互いの信頼関係を確立し、新しい市民主体の社会づくりへの一歩を踏み出すべき時が来ている。

## ◆ 朽山邦宣 (阪神・淡路大震災復興支援館)

### 災害ボランティアと共に働くかたち

阪神・淡路大震災では、史上空前の人々が兵庫県内はもとより国内外から被災地に駆けつけて、災害ボランティアとして多種多様なニーズに対応した救援活動や支援活動が展開されました。この活動は後世まで語り継がれることと思います。震災復興の一部署にいる者として心から感謝いたします。

災害の規模があまりにも大きく住民も行政も経験したことのない事ばかり、ボランティアの受入れも例外ではなく、当初はボランティア活動の推進体制が十分に発揮されない状況でした。ボランティアニーズとボランティアの円滑なコーディネートを図るための体制をどうするか大変重要なことです。

阪神・淡路大震災では、「何か役に立ちたい」そのような思いから多くの方が初めてボランティア活動に参加されました。とりあえず避難所に行けばなにかある、確かに炊き出しや救援物資の配付をはじめとして様々な活動の場がありました。しかし、避難所によっては人手が足りなくて困っている状態も生じました。

コーディネート機能が確立していればこのような事はなくなると思います。行政も含めお互いが恒根を取り外し、人と人が信頼しあった災害ボランティア、ここで養った知識と経験が共に働くかたちのノウハウをつくりあげているのではないのでしょうか。このことを何時までも忘れないでいたいものです。そしてまた、災害列島と言われる日本のボランティア活動に活かしていくことが大切であると思います。

避難所支援から始まったボランティア活動は、その内容を変化させながら応急仮設住宅や復興住

宅などでの活動へと移行してきました。その活動は被災された方々をはじめ被災地の復興に大きな力となっています。阪神・淡路大震災復興支援館(フェニックスプラザ)も復興に関する情報発信を行うとともに支援活動の拠点として「生活復興NPO情報プラザ」を開設していますので情報交換の場としても大いにご利用ください。

## ◆ 南部美智代 (災害ボランティアネットワーク鈴鹿)

### 私の三つ引ダンスから

何や、ええかっこして。いつまでそんな事しとるんや。俺はそんなヒマがあったら涼しい部屋で野球でも見るわ。暑いのに汗たらたら流してごころうさんな事やなー。それいくらもらえるんや。えっ?ただか。やめとけやめとけ。世の中にただ程高いものはないと言うやんか。迷惑されとるんと違うかー。「矢つぎ早やにほめてくれておおきに」と言い返してみたが、だんだん不安になってくる。そうかもしれやんなー、それでもな、と立ち上がる。

「何でボランティアするの?」って言われて、私はいつも同じ応えをするのさ。「楽しいから!」って。何が楽しいのって聞き返されると「人や!」と言うことにしている。人。「いろんな人にめぐり会う事で、自分を一日一日変えることができるやろう。いやな事ばかり言う人、お世辞ばかり言う人、仕事は二の次でしゃべってばかりいる人、何も言わんと働く人。その中で自分を研ぎ澄ませていく楽しさをこの頃ようやく見つけたんさ」

不思議と、ただの仕事をしていると人間が出て来る。いろんな人間。いろんな出来事。一つ一つ私の心のダンスに収めていく。人に会うたびに、この人はどの引出しに入るかな?と一人楽しんでいる。

ボランティアなんてもうやめようかな?と思う時、いつもこのダンスが私に助け船を出してくれる。「そんな時はこの手があるやんか」、「あの時こんな事もあったやろ」って。私はこのダンスに名前をつけた。見つめなおす、道を見つける、美智代の三つの「み」を取って、『みつびきダンス』く



## 「明日の災害ボランティアへ」

やすい事は下の方にしまって、カギをかける。楽しい事、うれしい事は上の方へ。いつでも出し入れしたいから。そして内緒の話はひみつの引出しに……。

一番上の大きな引出しを開けると、そこには、私の心の友達、ゆかちゃんが入っている。少し障害を持つ子。先日、一緒にボランティアの研修に参加した帰り道、「こんなにがんばったって役に立つのやら立たんのやら。あーえらかった」と口々にぼやく大人にまじってゆかちゃんが、「おばちゃん、また次ボランティアがあったら言って下さい。私、ボランティアをします。今日も楽しかったよ。今度は、ゆかも中学三年生ですからみそ汁作りの手伝いをします」と言ってくれた。皆でいつまでもパチパチと拍手。ゆかちゃん、ありがとう。もやもやも、苦労も、身体のかれも一度に吹っ飛んでしまうた。

「災害ボランティアを次世代に継ぐ」を合言葉にまたがんばっていこうと話している私達。でも、本当は子どもたちに教えてもろうて、自分達をみつめなおしているというのが本音。成長とよこびを引き出しに入れながら。

## ◆熊谷武士 (郵政省近畿郵政局総務部)

## 引き継ぎたい、人のあたたかさ

平成7年1月17日早朝、京都市内に住んでいる私は、震度5の激しい揺れにより叩き起こされました。その時は阪神・淡路地域であれほどの大災害が起こってしようとは知らず、大阪市内にある職場(近畿郵政局)へ電車を乗り継ぎ、ようやく到着したのが正午前でした。それが私の震災での色々な体験の始まりでした。

まず、はじめに何と言っても一生忘れられない体験は、最も大きな被害を受けた長田郵便局での郵便業務の応援です。普段、デスクワークの多い私は郵便物を区分し配達すること自体が新たな経験でした。

最初は小包の区分作業を行い、そして自転車や

郵便車で配達作業を行いました。配達作業で苦労したことは地震によりマンションのエレベーターが使えないため、水や食料の入った重い小包を階段を使って、昇り降りしたことです。

しかしながら、驚くことに配達に行くほとんどのお客様は震災の被害に遭いながらも「ご苦労さま」「大変ですね」と感謝の声をかけてくれました。本当は配達をする私たちより被災された人々の方が苦労が多いのに、逆にあたたかい言葉をかけられたことが本当に嬉しかったことを覚えています。その時初めて自分が今回の大震災の中で少しでも被災地の皆さんの役に立つことができた実感しました。

郵便局での業務応援は水・電気・ガスのない生活の大変さ、今、自分たちがどれほど恵まれた環境の中で日々過ごしているかを改めて知ることができました。そして最後に一番感じたのは「人のあたたかさ、強さ」を本当に感じた期間でした。

他にもいろいろな体験、想いをしましたが、この体験で得たことは忘れることなく後生に引き継いでいかなければならないと思っています。

## ◆国府田毅 (JRB・東京レスキューサポート・バイクネットワーク/隊長)

## 特技を活かした災害ボランティアをめざして

私たちの団体は偶然、阪神淡路大震災の起こる5か月前に静岡県浜松市で東海沖大地震を想定した災害バイクボランティアとして産声をあげました。以来3年、阪神淡路大震災の教訓から全国各地でこのバイクをいざというときに役に立てようという主旨が多くの方の共感と賛同を呼び、現在では1都21県、拠点27か所に約1300名が展開するまでになりました。

災害支援対策は多岐にわたりますが、私たちはまず人命救助を第一に考えています。大震災発生後の72時間、本格的な救出活動が始まるまでを自分たちの地域でバイクを使って救助資材の搬送や情報の伝達等で救出活動のお手伝いできれば



と日々訓練に励んでいます。とはいうものの、実際は交通規制等で思うようには動けないかもしれない等々、試行錯誤の繰り返しですが、いろいろな選択肢の中でこれだけは絶対にできるというものを持っていたいと思います。

現在静岡県では、AMDA(アジア医師連絡協議会)と連携して、航空基地より医師チームをバイクで被災地に搬送するという試みを行っています。これも災害時の活動における新たな選択肢の一つとして検討中です。このような活動の中で昨年あたりから各所で防災意識の低下を実感しています。「まだそんなことやってるの?」よく言われ

ます。もう忘れてしまったのでしょうか、残念な過ぎりです。しかし、毎月、2~3人のペースでメンバーが増えていることはうれしいことだと思います。何より、日ごろ自分が趣味で乗っているバイクを使うということで大変入りやすいことが長続きしている要因だと思います。今回本誌を通して災害ボランティアにも非常に多くの関わり方があることをあらためて知りました。それぞれの得意分野を有機的にこのネットワークに生かすことができれば最高だと思います。私たちのレスキューバイクの機動力を皆様の活動の中にも使っていただければと思います。

## ◆宮本秀利

(島原ボランティア協議会/代表)

●雲仙普賢岳噴火直後の混乱のため、1市16町の勉強会「十七会」のメンバーが救援活動を開始。現在は島の島原作りのため100年の森運動などを展開中。阪神大震災直後には経験を活かした「島原方式」を取り入れて救援物資を送ったほか、顔の見える関係を活かしメンバーが現地入りをした。

## 「防災は島原に学べ」と言われることが全国の方々へのお返し

1990年11月17日、普賢岳が噴火。翌年6月3日の大火砕流で私たちは43名の命を失いました。更に、山から流れ下る火や、毎日降り積もる灰、降る小石、土石流で郷里は焼け、埋まり、流れたのです。度重なる天災の前に成す術もなく、ただただ悲しみの中に祈るだけでした。

そんな中で地元の若者が立ち上がりました。大火砕流から2日目「雲仙岳災害ボランティア協議会」が設立。「自分たち民間にやれることは?」と考え、手探りの活動はトイレ掃除や空き家探し、職探し、物資仕分け…と少しずつ活動を広げました。全国から来たボランティアの受入れ窓口、行政との連携、心のケア、物資の配送…と休む間もありません。まさに阪神大震災のボランティアの原形がこの島原にあったのです。

私たちを今日まで支えてきた原動力は、郷里と人を愛する信じ合える仲間と、全国から頂いた多くの人の「情け」でした。返しきれない程の物心両

面の救いを受けたのです。91年1月、「島原ボランティア協議会」に改称。永久に組織を残し、できることから、少しでも全国の人にお返しをする第一歩にしました。「協議会」は奥尻を始め、鹿児島、阪神と、被災地へいち早く出動し、普賢岳災害で学んだノウハウを伝えました。

97年からは次の「イザ」に備えて救急救命法やサバイバル訓練を開始。「災害は忘れる間もなくやって来る。今こそ島原半島(1市16町)を災害に強い街づくりのヒナ型にしよう」と考えています。防災は島原に学べ、と言われることが全国の方々へのお返しと思います。

「島原ボランティア協議会」は組織強化のため人材の発掘、全国のボランティア団体、専門グループとのネットワークを計っています。今こそ安心して暮らせる社会、共に助け合える社会の確立のため、地域を越え、手を携えてボランティア活動を自由に展開できる社会基盤を作る時です。

## ◆長崎武巳

(奥尻町役場)

## 阪神・淡路大震災に寄せて

93年7月12日夜、北海道南西沖地震による津波が発生。直後から私は奥尻町の被害状況の把握と

関係機関との連絡に追われました。夜が明けると今度は避難住民への物資の手配。食料品、紙おむつ、生理用品…まず「救援物資」から私の作業が始まったのです。

物資は巡視船で対岸の江差町から沖まで運ば



## 「明日の災害ボランティアへ」

れ、タグボートで取りにいき、陸揚げ、そして配送。当初、作業は数十人の町職員、数人の町内ボランティアで昼夜敢行で行われました。しかし報道の恐ろしさでしょうか、見る見るうちにその数が膨れあがります。「町職員では対応できない。だれかの助けが必要」と実感しました。

そこに現れたのが思ってもみなかった「災害ボランティア」。結局その数は延べ1万人位でしょう。「現地に迷惑をかけず、衣・食・住はすべて自分で」という精神でした。ボランティア団体は本当に助かりました。私が一人のリーダーに言うだけで数十人の方が一生懸命動くのですから精神的に楽でした。また個人ボランティアも後半は仲間意識が生まれ、リーダーも現れて何人かに指示を出せば良いようになりました。ただ、離島という特殊条件下だったので現地への移動も車の手配

が大変。作業班の編成が限られ、無駄な派遣もありました。これら南西沖地震の教訓を箇条書きにしてみます。

①ボラの受入れ窓口を決め、分担人数など配置計画も必要。ボランティアの所属や身分等をハッキリさせる。ボランティア保険の加入も。

②物資の受入れ窓口も明確に。被災の状況にもよるが、初期は企業からのまとまった数の物資を受入れる。個人からは遠慮願ひ、状況に応じて本部から必要な物と数を公表し、電話で調整し送ってもらう。

③報道機関の「どんな趣旨の報道をするのか」をはっきり聞き出してから取材に応じる。

最後に南西沖地震の際に寄せられた全国の皆さんの暖かいご支援に対し、心からお礼申し上げます。

## ◆ 郵上了圓

(真宗大谷派・兵庫県南部地震災害救援本部/事務長、大阪教務所/次長)  
●震災当時は京都の本山で地震災害救援本部で広報担当

## 私たちが宗教教団の課題

私たちは、自分のおかれた現実の諸問題の解決に関わる中で、人と人との真の出会いと連帯(きずな)が育つようなボランティア活動を願って止みません。親鸞の教えを受ける念仏の徒として、布施奉仕のボランティア活動をどう展開していけるか模索しています。先の震災から私たち宗教団体が今後取り組んで行くべきいくつかの課題が明らかになりました。

まずボランティアネットワークづくりをすることです。震災の時、私たちが直接関わるボランティア組織や紹介できる団体もほとんど持ち合わせておりませんでした。多くの全国の仲間からの「何か自分がやれることは」との問いかけにも受け皿がありませんでした。また今回の震災から素人のボランティア活動の限界が指摘され、さまざまな分野の専門家が有機的に活動できる組織と養成が急務であり、私たちの教団にも期待されています。その様な中で取りあえず宗派内のネットワーク化と他の活動されている団体とのコミュニ

ケーションが必須だと感じています。

第二に災害が起こってから物資を集めては間に合わないことがはっきりしました。物資の収集、管理及び輸送のシステムを作ることです。また私たちの教団は全国各地に広い境内を要している寺院があり、災害時に地域に活用していただけるような体制も考えて行かねばなりません。具体的には以上の三点ですが、災害は一番弱い立場の人が取り残されます。1998年1月17日、兵庫県教育会館での追悼式での喜多紗友美さんの「生きていたからこそ」のメッセージを憶い、行政に出来ないことを地道にやっておられる方々と共に息の長い活動をして行きたいと願っています。

## ◆ 林田 浩

(東京災害ボランティアネットワーク/運営委員)

## ネットワーク誕生と課題

阪神・淡路大震災では、様々なボランティア団体が救援活動を行ったが、多くの団体が緊急災害救援活動のノウハウがなかったことや、平常時か



ら互いに情報交換していなかったことから、救援活動は円滑に実施されたとはいえない。

こうした経験を踏まえ、東京近辺を中心に活動しているいくつかの団体が話し合いをはじめ、いくつかのハードルを乗り越え、阪神・淡路大震災から3年目にあたる平成10年1月17日に「東京災害ボランティアネットワーク」が誕生した。

しかし、ネットワーク誕生後も、必ずしも運営が円滑に行われたとはいえない。災害時に活動するボランティア団体のネットワークとはいえ、法人化された団体と任意団体、企業、宗教団体など様々な種類の団体が参加しているため、常に考え方や意図が一致しているとはいえず、やむを得ないことではあるが、コンセンサスの形成がむずかしい。また、事務局をどこにおくのか、誰が運営

するのかが問題になったが、東京ボランティア・市民活動センターの協力を得て乗り切ることができた。そのほかに、名簿づくりやパンフレットなどの印刷物の作成等、ネットワークの運営に必要な財源の確保も大きな課題である。さらに一般市民への認知度の向上のためにも、これから様々な活動をとおして啓蒙していかなければならない。

今後、日本の各地でこうしたネットワークが次から次へと誕生すると思われる。ネットワークの運営にあたっては、行政の認知と協力を得ながら、より多くの団体や企業等が災害ボランティア活動に参加し、必要な財源を確保するとともに、最大の目標である災害救援活動という共通概念を深く認識し、互いの立場を尊重しながら協力することが望まれる。

## ◆植山利昭

(神奈川災害ボランティアネットワーク/副代表)

●1997年4月、神奈川県において市民の防災意識の向上、災害ボランティアの育成を推進しようと結成されたネットワーク。現在、川崎、横浜、小田原、横浜須賀に拠点を置き、講習会やワークショップの開催などを通して活動を進めている。

## 災害を迎え撃つ、街づくりとは

阪神・淡路大震災の残した教訓を考える時、特に、都市化の進んだ神戸市・芦屋市・西宮市の惨状を、まず頭に叩き込んでおく必要があります。即ち、あらゆる意味で失敗例だったという事です。そこから出発する事が、多くの犠牲者や、今尚苦しんでいる人々と思いを共通に出来るのではないのでしょうか。

市民の意識や生活様式が、これほど多様化し、

分散化した現在、震災は我々に何を突きつけたのでしょうか。国や県や市など、行政等の危機管理体制の不備をはじめ、「災害弱者」の問題点などなど、我々の近代化とは何だったのでしょうか。

震災をはじめ、災害に備え、迎え撃つ姿勢こそが、基本とされなければならなかったのです。少なくとも我が祖先は、大なり小なり、その意識を持っていました。近代化、都市化と引き換えに失ったことも多かったわけです。

一方、阪神・淡路大震災時、ボランティア元年ともいわれました。外からのボランティア活動には効果があったことは、特筆すべきです。情報の大切さもわかりました。それに引き換え、コーディネーターの不足が指摘されました。言い古されたことですが、地域に密着したコーディネーター・リーダーこそが必要とされたのであり、地域のコミュニケーションをいかに確保していくか、創り出していけるか、が大切なのです。その事をまず頭に置きながら、災害を迎え撃つ体制をいかに創り出していくか、災害に強い街づくりを進めるにはどうすべきか、を具体的に考えていきましょう。





## 『明日の災害ボランティアへ』

## ◆ 渥美公秀

(日本災害救援ボランティアネットワーク)

●震災当時は西宮市立安井小学校非難所で風呂焚き、西宮ボランティアネットワークにて記録および研究。

## 教訓を活かしていくために

阪神・淡路大震災以来、救援活動の様々な場面に参加したボランティアは、多くのことを学びあってきた。今こそ救援活動での教訓を今後の災害救援に活かして行くための展望が必要な時期にきている。

まず、自己点検が必要だろう。これまでの活動を振り返り、自己の次なる目標を立ててみる。次に、他の諸団体の具体的な活動事例についての学びが必要だと思う。他の団体の活動記録を読み、顔を合わせて話し合い、互いの体験を共有する。他の団体の活動を学ぶ時は、いつ誰がどういった活動をしたかという表面上のこと(「知識」)だけではなく、その活動がどんな「思い」から行われたのか(「知恵」)を学び合う必要があると思う。知恵には「心」がある。「心」のこもった活動の知恵を他の団体の活動から学ぶようにしたい。

最後に、活動を抽象化して考えていく努力が必要だろう。抽象化するとは何も難しく考えること

ではない。例えば、阪神・淡路大震災と重油流出事故を比べてみて、自然災害と事故、危険物質の取扱い、現地の気候条件への配慮、被災者(被害者)の生活を中心とした活動指針、といったテーマが浮かべば、それは立派な抽象化の一つである。

自己点検、学習、抽象化といった作業は、次の災害救援活動に活かしてこそ意義深いものになる。そのためにも今から災害救援に関連する諸団体のネットワークを模索しておくことが大切だと思う。ネットワークでは、様々な団体が知恵の交渉を行い、協力し合って新たな知恵を創出し、その知恵の蓄積を次の参加者、ひいては、次の世代にまで継承していく活動を行っていくべきであろう。災害や事故は悲惨だが、その苦しみを少しでも和らげることで出来るよう皆で協力して「知恵の輪」を築いていくことが必要だと感じている。

## ◆ 畑 厚彦

(日本赤十字社)

## これからの災害ボランティアへのメッセージ

「行かないこともボランティア」という逆説的な言葉を、あえてメッセージとしておきたいと思います。

被災者にとって、その支援が本当に必要なのかどうかを私たちはどの様にするのでしょうか。アメリカ赤十字社が被災者救援の場合に、自らの戒めとしていることのひとつに「被災者の尊重」ということがあります。

- 自立の尊重(最終的には、自分で立ち直って行くべき個人として、被災者と接しなさい)
- プライバシーと秘密の保護

- 被災者一人一人の尊重(個人個人のバックグラウンドに関わりなく接しなさい)

- 障害者ニーズへの対応

- 相手の気持ち・立場の尊重(自分が受けたいと思う対応をしなさい)

災害ボランティア活動の最終的な目的は、被災者の自立支援であるとおそらく言い切ってもいいと思います。

だとすれば、活動しないことも場合によっては、ボランティアとして必要な視点だともいえるのではないのでしょうか。